

# 気管支喘息児の施設入院療法における性格の変化と喘息の予後との関連

(分担研究：長期療養児の心理的問題に関する研究)

岡田正幸、土居 悟、井上寿茂、高松 勇  
村山史秀、亀田 誠、豊島協一郎

要約：Y-G性格検査を用いて、大阪府立羽曳野病院アレルギー小児科において施設入院療法を実施した小中学生、男子84名、女子57名、計141名の入院中の性格変化と退院1年後の喘息重症度等との関係を検討した。その結果、男女とも入院中に情緒が安定すると喘息症状の改善度がよいことが示唆された。行動面での積極化と喘息症状の改善には一定の傾向はみられなかった。退院1年後の喘息治療予防用薬剤数の変化では、男女とも情緒が不安定化したものに薬剤数が増えたものが多かった。退院後1年間の発作入院回数についても検討を加えた。

見出し語：気管支喘息児 施設入院療法 Y-G性格検査 入院中の性格変化 情緒安定性 行動の積極性  
退院後1年間の経過 喘息重症度 喘息治療予防用薬剤 発作入院回数

研究対象：羽曳野病院アレルギー小児科において、1986年1月から1992年10月までに施設入院療法を受けて退院した小、中学生気管支喘息児、男子124名、女子76名のうち、入退院時にY-G性格検査<sup>1)</sup>(以下Y-G検査)を実施し退院1年後の経過を追跡できた、男子84名、女子57名、計141名。複数回にわたって施設入院した者は初回時を対象とした。

研究方法：入院時と退院時に行ったY-G検査の変化は、Y-G性格タイプの5類型を用いて検討した。各タイプの特徴を表1に示した。各タイプには典型のほかにも準型、混合型を含めて処理した。

入院中の性格変化は表1の各タイプの特徴に従い、Y-Gタイプの変化を、情緒面では情緒安定化群(B, E→A, C, D A→C, D)、不変群(入退院時同タイプ B⇔E C⇔D)、情緒不安定化群(A, C, D→B, E C, D→A)に分類した。次に活動性、向性を行動面としてとらえ積極化群(C, E→A, B, D A→B, D)不変群(入退院同タイプ B⇔D C⇔E)消極化群(B, D→A, C, E A→C, E)に分類した。社会適応性については、DタイプとEタイプの特徴が一義的でないため今回は検討から除外した。

これらの入院中の情緒面と行動面の性格変化と、1) 退院1年後の喘息重症度変化、2) 退院1年後の喘息治療

表1 Y-G性格検査プロフィールの類型

	情緒安定性 D C I N	社会適応性 O Co Ag	活動性・向性 R G T A S
A 747*	平均	平均	平均
B 747*	不安定	不適応	外向
C 747*	安定	適応	内向
D 747*	安定	適応または平均	外向
E 747*	不安定	不適応または平均	内向

Y-G性格検査実施手引-日本・心理テスト研究所-  
予防用薬剤の増減、3) 退院後1年間の発作入院回数との関連を検討した。尚、検討は性差を考慮して男女別に行った。研究結果：対象の呼吸困難を伴う定型的な喘息発作の発症年齢の平均は、男子47.3月±31.9月、女子59.2月±40.3月、日本アレルギー学会基準による入院時の喘息重症度は、男子で軽症1名、中等症48名、重症35名、女子は軽症3名、中等症38名、重症16名である。入院日数の平均は男子197.7日±127.5日、女子233.6日±139.7日である。喘息発作の発症年齢平均は女子の方が高く、入院日数平均は女子の方が長かったが、男女間でt検定により統計的有意差はなかった。喘息重症度は男女間でχ<sup>2</sup>検定により統計的有意差はなかった。

次に、1) 退院1年後の喘息重症度の変化について、男女別にみたものが表2である。

大阪府立羽曳野病院アレルギー小児科

Department of Pediatric Allergy, Osaka Prefectural Habikino Hospital

男子では情緒面で、退院1年後に喘息症状の改善がみられなかった（悪化+不変）は、不安定化群が30%で他の群より成績が悪かった。症状の改善をみたものでは、（2段階以上の改善）でみると安定化群が53.3%で他の群を上まわった。行動面では（悪化+不変）は消極化群が28.6%でやや成績が悪かった。（2段階以上の改善）でみると積極化群が35%で他の群より成績が悪かった。

次に、同様に女子の情緒面では、（悪化+不変）は、不安定化群が35.7%で他の群より成績が悪かった。（2段階以上の改善）でみると安定化群が50%で他の群を上まわった。行動面では、（悪化+不変）は積極化群が33.3%で成績が悪く、（2段階以上の改善）は消極化群が62%で成績が良かった。男女共、喘息重症度変化の各段階で情緒面及び行動面の3群間に $\chi^2$ 検定により統計的有意差はなかった。

2) 退院1年後の喘息治療予防用薬剤では、薬剤の使用種類の増減から減剤群、不変群、増剤群の3群に分けて検討した。男女別に結果を示したものが表3である。

男子では情緒面で、減剤は不変群13.6%のみであった。薬剤数不変は、安定化群が73.3%で他の群より数値が高かった。増剤は不安定化群が40%で成績が悪かった。行動面では減剤は不変群の14%のみであった。薬剤数不変は、積極化群、消極化群とも約70%、増剤は積極化群30%、消極化群28.6%と、いずれも両群間の差は小さかった。次に、女子では情緒面で、減剤は不安定化群が14.3%で成績が良く、薬剤数不変は安定化群が85.7%で数値が高く、増剤は不安定化群が50%で成績が悪かった。行動面では、減剤は不変群が16.7%で成績が良く、薬剤数不変は積極化群が71.4%で高く、増剤は消極化群が41.7%で成績が悪かった。男女共、減剤、薬剤数不変、増剤で情緒面及び行動面の3群間に $\chi^2$ 検定により統計的有意差はなかった。

次に、3) 退院後1年間の発作入院回数を男女別にまとめたのが表4である。喘息発作による1ヵ月未満の入院を発作入院として扱い、1ヵ月以上にわたる入院は再入院として扱った。

施設入院療法をうけて退院した後、季節の影響や学校行事の負担などから一時的に調子を崩すことも少なくないので発作入院回数（0-1回）を喘息発作がまずコントロールされた状態と考え、性格の変化との関連をみた。

男子では情緒面で発作入院（0-1回）は不変群が74.6%で成績が良く、続いて安定化群が67.7%であった。再入院は安定化群、不安定化群いずれも20%であった。行動面は、（0-1回）は消極化群が85.7%で成績が良かった。再入院も消極化群が0%で最も成績が良かった。

表2 Y-G性格検査の変化と喘息重症度変化

	重症度	情緒面			行動面		
		安定	不変	不安定	積極	不変	消極
男子	悪化	0	2	0	0	2	0
	不変	3	12	3	5	11	2
	改善1	4	22	3	8	19	2
	改善2	3	16	4	6	17	0
	改善3≤	5	7	0	1	8	3
計	15名	59名	10名	20名	57名	7名	
女子	悪化	1	0	0	0	1	0
	不変	3	7	5	4	7	4
	改善1	3	11	3	4	9	4
	改善2	7	8	5	4	4	2
	改善3≤	0	3	1	0	3	1
計	14名	29名	14名	12名	24名	21名	

\*喘息重症度の変化は発作強度及び頻度が増したものが悪化、変わらないものが不変、1段階の改善が改善1、同様に改善2、改善3段階以上

表3 Y-G性格検査の変化と喘息治療薬剤の増減

	薬剤数	情緒面			行動面		
		安定	不変	不安定	積極	不変	消極
男子	減剤	0	8	0	0	8	0
	不変	11	37	6	14	35	5
	増剤	4	14	4	6	14	2
	計	15名	59名	10名	20名	57名	7名
女子	減剤	0	3	2	0	4	1
	不変	12	18	5	15	14	6
	増剤	2	8	7	6	6	5
	計	14名	29名	14名	21名	24名	12名

表4 Y-G性格検査の変化と発作入院回数

	入院回数	情緒面			行動面		
		安定	不変	不安定	積極	不変	消極
男子	0回	8	38	6	11	36	5
	1回	2	6	0	1	6	1
	2回	0	3	2	2	3	0
	3回≤	2	6	0	3	4	1
	再入院	3	6	2	3	8	0
計	15名	59名	10名	20名	57名	7名	
女子	0回	11	14	6	11	11	9
	1回	1	6	3	3	5	2
	2回	0	6	0	1	5	0
	3回≤	1	2	4	5	2	0
	再入院	1	1	1	1	1	1
計	14名	29名	14名	21名	24名	12名	

\*再入院とは1ヵ月以上の入院をさす。

次に、女子では情緒面で発作入院（0-1回）は安定化群が85.7%で最も成績が良かった。再入院は安定化群、不安定化群とも7.1%で同率であった。行動面は、（0-1回）は消極化群が91.7%で成績が良かったが、再入院は消極化群が8.3%で他の群より成績が悪かった。男女共、発作入院の各回数で情緒面及び行動面の3群間に、 $\chi^2$ 検定によりいずれも有意差はなかった。

考察：施設入院中の性格面の変化と退院後の喘息症状、薬剤使用数の増減、発作入院回数について順次考察する。1) 退院1年後の喘息重症度と性格の変化との関連では、施設入院療法の退院後の経過で喘息症状の改善がみられなかった（悪化＋不変）の頻度と、相当な改善がみられた（2段階以上の改善）の頻度からみると、男子の情緒面で（悪化＋不変）は情緒不安定化群が30%で他の群より成績が悪く、（2段階以上の改善）は情緒安定化群が53.3%で、他の群より成績が良く、統計的有意差はないが情緒安定が喘息症状の改善に関連することが示唆された。行動面では（悪化＋不変）は積極化群、不変群、消極化群の比率は余り変わらず、（2段階以上の改善）で積極化群は35%で他の群よりも成績が悪く、1段階の改善にとどまっているものが多かった。行動面の積極化と喘息症状の改善との間にはっきりとした傾向は認められなかった。

女子の情緒面では、（悪化＋不変）は情緒不安定化群が35.7%で成績が悪く、（2段階以上の改善）は情緒安定化群が50%で他の群より成績が良く、男子と同様に情緒の安定が喘息症状の改善に寄与することが示唆された。行動面は（悪化＋不変）、（2段階以上の改善）でいずれも消極化群の成績が良く、行動面の積極化と喘息症状の改善との結びつきはみられなかった。

喘息児の施設入院療養は患児の心理面と身体面の双方に好ましい影響を与え、喘息症状の改善をもたらすものと考えられる。当科では施設入院の中で喘息児に情緒的な安定をもたらせる集団運営を心がけており、症例によっては心理療法を含む個別的なアプローチを行っている。今回の結果から施設入院中の情緒の安定が、退院後の予後に男女とも好影響を与えることが示唆され、今後ともこのような取り組みが重要と考えられた。一方、行動面では入院中の日常生活で仲間関係のつながりを深め、鍛錬活動で活動性を高め、行動面の積極性を養うように患児に働きかけている。今回の結果では、男女とも行動面の積極化と喘息症状の改善との関連は認められなかったが、今回は除外した社会適応性を含めてさらに検討が必要と思われる。

2) 退院1年後の喘息治療予防用薬剤では、使用薬剤数の増減をさきに検討した喘息重症度の推移と合わせて考えると、男子の情緒面で情緒安定化群が不安定化群より喘息重症度の改善が良いことが示唆されたが、使用薬剤数では不安定化群の増剤%が高く、薬剤効果を考えると両群の差はより大きいと考えられた。行動面では2段階以上の改善で積極化群の成績が消極化群より悪かったが、使用薬剤数では両群間に差はほとんどなく、両群へ

の薬剤効果は差がないと考えられた。

次に、女子においても男子と同様に情緒の安定が喘息症状の改善に寄与することが示唆されたが、使用薬剤数は情緒不安定群に増剤%が高く、情緒安定化群と不安定化群に差がある可能性は強いと考えられた。行動面では消極化群の成績が良かったが、使用薬剤数では消極化群は増剤%が高いものの、一方、減剤となったものもあり薬剤効果の面からは一定の方向は認められなかった。

最後に、3) 退院後1年間の発作入院回数では、男子で発作入院1回以下は情緒安定化群の成績が不安定化群をやや上回ったが、施設入院療法の成果が継続しなかった再入院例は安定化したものでも20%あり、不安定化したものと同率であった。再入院には身体的な要因のほか、家庭や学校の受け入れ状況などが関与しているが、施設入院中に情緒が安定化しても退院後の再入院の危険性については十分な注意をはらう必要がある。行動面は発作入院1回以下、再入院はいずれも消極化群の成績が良く、予想に反する結果であった。この理由については明確な判断を下しにくい、行動面が積極的になるとそれだけ周囲との衝突も多くなり、ストレスにより一時的に発作が増悪し発作入院につながるのではないかと推測された。

次に女子では、情緒面で発作入院1回以下は安定化群の成績が良く、男子よりも不安定化群との差が大きかった。再入院は安定化群、不安定化群とも7.1%で再入院の危険性に差はなかった。行動面は発作入院1回以下は消極化群の成績が良く、男子と同様な理由が推測された。

今回の検討の結果、施設入院中の情緒の安定化と喘息症状の改善との関連が示唆されたが、今後Y-G検査の尺度値も用いてさらに検討を加えたい。

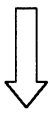
#### 参考文献

- 1) 辻岡美延：新性格検査法—Y-G性格検査応用研究手引 日本心理応用研究所、1977.



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:Y-G 性格検査を用いて、大阪府立羽曳野病院アレルギー小児科において施設入院療法を実施した小中学生、男子 84 名、女子 57 名、計 141 名の入院中の性格変化と退院 1 年後の喘息重症度等との関係を検討した。その結果、男女とも入院中に情緒が安定すると喘息症状の改善度がよいことが示唆された。行動面での積極化と喘息症状の改善には一定の傾向はみられなかった。退院 1 年後の喘息治療予防用薬剤数の変化では、男女とも情緒が不安定化したものに薬剤数が増えたものが多かった。退院後 1 年間の発作入院回数についても検討を加えた。